

18世紀英国「サロン」文化の芽生え

— ウィンチルシー伯爵夫人アン・フィンチを起点にして —

海老澤 邦 江*

Abstract

Needless to say that Lady Augusta Gregory is a major prominent figure and patroness in the Irish Renaissance, her 'literary salon' makes a great contribution to establish both cultural and literary legacies. 'Salon' has played a significant role in Europe for several centuries since the 16th century as a specific and unique 'place' for a variety of communication, an intellectual exchange of information and upbringing of talented figures in art and academic realms or politics. During the Augustan age (1680-1730), which is the specific period of forming a public realm in Britain, several female writers begin to make their writings publicized. A prominent female figure of them is Lady Anne Finch, Countess of Winchelsea, who was highly praised by not only J. Swift, J. Dryden or A. Pope in the 18th century but also by Wordsworth, and considered as the forerunner of the Romantics in modern times. Consequently, she is highly regarded as a pre-Romantic poet and as a prominent poet of the first generation of women writers. This essay views modern aspects and distinguished characteristics of her poems, dealing with gender issues, which was very rare at that time.

Keywords: the 18th century literary salon, women writers, culture and communication

1. オーガスタン時代の文化における 公的「領域」と「サロン」

そもそも19世紀末から20世紀初頭に起こったアイルランドの文芸復興運動が、一人のアンダロ・アイリッシュ系貴族グレゴリ夫人(Lady Isabella Augusta Gregory, 1852-1932)を中心に当時の才能豊かな文人を巻き込み、経済的問題・政治上の問題にたびたび阻まれながらも、現在のアイルランド国立劇場アビー劇場(The Abbey Theatre)やヒュー・レイン・ダブリン市立美術館(Dublin City Gallery The Hugh Lane)の創設、さらにアイルランドの文芸発信を成し遂げ、アイルランド文化の礎を固めたことは周知の事実

である。植民地時代の終焉、民族自決の時代性が後押ししたにせよ、必ずしも公的な機関として認知されたわけではない貴族夫人の、文芸活動を媒介にした私的な「集まり」が政治的、社会的、文化的領域において強い影響力を持ち得たことは特筆すべきことである。グレゴリ夫人を中心としたグループの活動に関する研究蓄積は多くあるが、その「集まり」を「サロン」の観点から論じられることは少なかった。「サロン」と規定されることはあっても、それは多分に18世紀英国に見られた「サロン」の延長線上で捉えられることが多いようだ。「サロン」を現代的視点から捉えた場合、18世紀の意味とは大きく異なるし、近現代的意味を持った市民活動に発展した可能性が認められるであろう。英国18世紀に誕生した「サロン」は、いわば「閉じられた空間」のヨコ軸の社会的拡張とも言える側面を持っている。社会を牽引する階級・産業界の変化によって構成するメン

2019年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科教授 英詩、英語圏文学、文化比較

パーにも大きな変化が見られる。「サロン」が1世紀の時間を経て、階級のヨコ軸だけでなく、より多様な領域への拡大・拡張を果たした。本研究の目的のひとつは、そうした時間的経緯を経てもたらされた内容の質的变化を検討することであり、さらに多様な「集まり」によって創始される活動の活躍を目にする21世紀現代に様々な示唆を与えるであろうことを明らかにすることである。

まず、文化を主な舞台とする、公的知的コミュニケーションの場としての「サロン」の出発点はヨーロッパであり、「サロン」を形成し社会システムの中で機能が認められるのはフランス、イタリア、ドイツ、イギリス、北欧の諸国に特定される。「サロン」をテーマにする際の大きな課題は、「サロン」を持つ地域がヨーロッパ全体に渡り、さらに各国・地域での政体のあり方が「サロン」の内容を大きく左右するので、全体を俯瞰しうる共通項を設定しにくい点である。だが、本論では、「サロン」の公共的領域に注目したユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas, 1929-) の『公共性の構造転換』を手掛かりに、彼の「サロン」の定義ならびに概念を検証した後に、特に18世紀英国の「サロン」のあり方を検討してみる。ハーバーマスは、長い時間の経過の中で展開し変質する「サロン」の存在を、かなり大胆だが簡便に以下のように要約している。

とはいえ文芸的公共性は、生まれつき市民的なものというわけではなく、国王の宮廷の具現的公共性の中から伝えられてきた由緒を保っている。教養ある中産階級の市民的前衛が、公共的論議の術を習得したのは、「優雅な世界」——宮廷貴族の社交界——とのコミュニケーションにおいてであった。しかしこの社交界も、近代的国家装置が国王の身边から自立化するにつれて、いまや宮廷から次第に分離して、都市の中で宮廷に対立する勢力となっていた。「都市」は、経済的にみて市民社会の生活中枢であるだけでなく、「宮廷」との文化政策的対立関係からみれば、そ

れはとりわけ初期の文芸的公共性を示す名称であり、これが喫茶店やサロンや会食クラブという形で施設化されるのである。あの人文主義的貴族主義的社交界の後継者たちは、市民的知識人との出会いにおいて、やがて公共的批判へ展開する社交的会話をつうじて、くずれゆく宮廷的公共性の名残と新しい市民的公共性の先駆けとの間に、橋を架けることになる⁽¹⁾。

ハーバーマスは続いて、公権力の領域に国家と宮廷を、私的 (民間的) 領域に市民社会と小家族的内部空間 (市民的知識層) をそれぞれ割り当て、社会の基本構図の図式化を試みている。

さらに『公共性の構造転換』によると、17・18世紀の社交界における「公衆」の定義にフランスとイギリスの大きな差異が窺えて興味深い。「サロン」が制度としての施設「場」としての定義を持つようになったのは、17世紀フランスにおいてである。それまで「サロン」とは、イタリア・ルネサンス期の用法に従って、単に豪華な広間を意味し私室やサークルの意味はなかった。17世紀のフランスでは「公衆」とは、「芸術と文学の受け手、消費者、批評家としての読者、観客、聴衆」を示す。それは、第一に宮廷を指し、さらに都市貴族でも上層貴族やごく限られた上流市民層を指す。この時点の「初期の公衆」には「宮廷」と「都市」が属していたが、宮廷に対して一定の自立性と気取った作法が確立し始め、基本的には非生産的な都市貴族と有力な文筆家・芸術家・科学者の市民階級との交流が現れる。これが、18世紀の典型的なサロン形態へ発展してゆく。しかし、17世紀においては上流社会の圧倒的支配にあり、宮廷を代弁する具現的領域に留まる。さて、イギリスに目を向けると、フランスとの決定的な違いは、名誉革命以前のスチュアート朝において「宮廷が都市を一度も支配することがなく」「文学と芸術は国王の具現に奉仕していた」⁽²⁾と指摘している。というのも、ロンドン市が国王の直領にならず、選出された市会議員によって自治制を取っていたため、行政上・司法上独立した立

場を維持していたからだと論じている。イギリスとフランスで見られる都市の優越について、以下のような分析を行っている。

「都市」の優越は、イギリスとフランスとで一差異はあっても同一社会的機能を引きうけた新しい施設や慣行によって確立された。それは1680年から1730年の間の最盛期における喫茶店（coffee-house）と、摂政時代と革命との中間期におけるサロンである。これらは、イギリスでもフランスでも、最初は文芸的な、政治的な批判の中心であり、その中で貴族主義的社交界と市民的知識層との間に、一種の教養人としての対等関係が次第に形成されはじめる⁽³⁾。

英国とフランス両国にとって、1680年代から1730年代の時代は近代社会への転換点ともいうべき重要な意味を持つ時期なのかもしれない。フランスでは、貴族階級と市民階級が交流する「場」（施設）としての「サロン」を確実に形成し始めたのに対し、イギリスは革命後の混乱もあり、フランス「サロン」の代替施設とも言える、知識階級や有産階級の男性を中心とした情報交換の施設「コーヒーハウス」が誕生した。18世紀初頭の10年間で3000軒もの「コーヒーハウス」が林立した隆盛は、大陸から王を迎えたイギリスの議会政治の活性化と市民階級の台頭とが強く結びついている。そして、ここに集った者から著名かつ権力を手中にする文人・政治家、特に、アディソン（Joseph Addison, 1672-1719）、ステイール（Sir Richard Steele, 1672-1729）が中心となったマス・メディアの胚子ジャーナリズムの誕生を見るのである。

この時期に活躍した文学者には、ジョン・ドライデン（John Dryden, 1631-1700）、ダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）、ジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift, 1667-1745）、アレクサンダー・ポープ（Alexander Pope, 1688-1744）、サミュエル・ジョンソン（Samuel Johnson, 1709-1784）らの名前が挙げられる。女性の

著述家は極めて少なく、現代まで作品が残る文人の代表は、英国初めての職業作家と言われるアフラ・ベーン（Aphra Behn, 1640-1689）、前ロマン派の嚆矢とされるウィンチルシー伯爵夫人アン・フィンチ（Anne Finch, Countess of Winchilsea (née Kingsmill) 1661-1720）が日本では挙げられる。アンはスチュアート朝最後の王チャールズ2世の妻モデナのメアリの侍女を務めた経験を持ち、豊かな教養を備え、夫とともにジャコバイトの立場を堅持していた。革命後、社会の中枢からはずれ不安定な人生を送ったが、それはまた、当時の社会背景を体現した英国上流階級に生きた貴族の雛型とも言える。

この1680年から1730年の期間は、女性の書き手の誕生を考察する際に極めて注目すべき時代であることを示すデータがある。2004年に完成した *Oxford Dictionary of National Biography* のデータベース⁽⁴⁾ から、この時期に活躍した著述家の数と男女比が明らかにされている。実際には17世紀後半から19世紀前半までのデータがあるが、本テーマの舞台となる1680年から約50年のデータを以下に示し著述家層の推移を考察してみる。

	合計	男性 (人)	女性 (人)	女性 比率	増加率 (女)	(男)
1680-1689	78	72	6	7.6		
1690-1699	70	66	4	5.7	66.6	91.6
1700-1709	77	70	7	9.0	175.0	106.0
1710-1719	86	77	9	10.4	128.5	110.0
1720-1729	94	83	11	11.7	122.2	107.7

このデータによると、名誉革命以降のいわゆるオーガスタ朝時代には、総数としての著述家の人数は増加傾向にある。18世紀に入ると「コーヒーハウス」の隆盛期とともに、男女ともに著述を行う者が微増している。実数では大きな差異ではないが、女性著述家数に大きな動きが見られる。特に、「コーヒーハウス」熱が衰退し始める1830年以降に女性著述家数が飛躍的に増加する傾向にあ

ると容易に想像される。これとは別の次元、識字率に組み入れられるかどうかの微妙な判断基準、つまり自己の署名ができるか否かの統計によると、1640年に署名可能な割合は男性：33%、女性：10%に過ぎない。1700年になると男性：50%に対し女性：30%、1760年には男性：60%、女性40%と飛躍的に伸びている⁽⁵⁾。文芸サロンがフランスにおいて果たした文明化を促す役割は、英国ではカフェ（コーヒーハウス）に課されたとハイデン＝リシュは述べる。また、英国宮廷文化の歴史で一貫して窺えるのは、「文学の育成」と詩人に与えられた「桂冠詩人」という特別な地位であり、こうした宮廷の態度は1561年に英訳されたバルダッサレ・カスティリオーネ（Baldassare Castiglione, 1478-1529）の宮廷手引き『宮廷人』（*Il libro del cortegiano*, 1528）の影響があると述べている⁽⁶⁾。

2. 「サロン文化」前夜—アン・フィンチの「書く」行為

フランスから半世紀近く遅れ、また異なる社会的文脈からなる英国の「サロン」誕生の前夜とも考えられるこの時期を代表するアン・フィンチの作品の検討は、「サロン」による文芸活動の内容とその質を明らかにすることにつながると推測する。そこで、女性のペンによる自己表現活動、社会と個人とのつながりという2つの視点から、まず彼女のフェミニズムを先取りした代表的作品2篇を検討する。

アン・フィンチは、代々王党派の旧家に生まれ、幼いうちに父母が他界したため、残された姉とアンの3人は、母方の叔父の家で養育されたようである。歴史家グレゴリオ・レティ（Gregorio Leti, 1630-1701）の記録によると、1682年当時デューク侯だったジェイムズ2世の妻モデナのメアリ（Mary of Modena, 1658-1718）付きの6人の侍女の一人としてアンの名がある。この記述以外、成人に達するまでの記録は一切ないために、彼女が21歳までの履歴については不明である。宮廷生活を送る中で、デューク侯付きの鉾槍隊長

を務めるヒネージ・フィンチ（Heneage Finch, 1657-1726）と出会い結婚、宮廷を辞す。1688年の名誉革命によりジェイムズ2世が王位を追われた後も、夫ヒネージはジェイムズへの忠誠を守りプロテスタントへの改宗もしなかったために、すべての公職から追放され困窮生活を送る。さらに一時期、ジェイムズ2世を慕って彼は大陸に渡るが、捕縛され英国に送り返される。釈放後、甥のウィンチルシー伯爵チャールズ・フィンチ（Charles Finch, 1671?-1712）の招きによってイングランド南部のケント州イーストウェル（Eastwell）に居住することになり、ようやくアンは夫と生活を共にできるようになるが、甥チャールズの死亡によりヒネージが爵位を継ぐことになる。私生活についてはあまり知られていないが、政変によって二人の生活は大きな変化を余儀なくされたものの、子供のいない二人の生活は比較的穏やかであったらしい。夫ヒネージは考古学的趣味を持ち明朗快活な人物であったらしく、一方の妻アンは文学の深い教養に恵まれ、当時の有名な文人たちと交流を持ちながらも、深い憂鬱症に悩まされたこともあった。

アンの文筆活動は、夫が爵位を継ぎロンドンに戻った時期に表舞台に現れるようになるが、実際には17世紀末からすでに幾つかの作品は、上流貴族では知られていたようだ。公けになった一番早い時期の作品が、マルボロ侯爵所有の17世紀の手稿の束から発見されている。また、ジャコバイトの詩人ならびに政治家ウィリアム・シッペン（William Shippen, 1673-1743）がアンの作品の賛辞を書き、批評家・詩人チャールズ・ギルドン（Charles Gildon, 1665-1724）が彼女の作品を採用した詞華集を編纂し世に出したのが1701年。これが、アン・フィンチが詩人・文人として登場する初めての記録である⁽⁷⁾。その後、詩を介して、ポーブヤスウィフトとの知遇を得、ヘンリー・パーセル（Henry Purcell, 1659-1695）がアンの作品のひとつに譜をつけ、当時の桂冠詩人ニコラス・ロウ（Nicholas Rowe, 1674-1718）がアンの作品4篇を詩文集に紹介している。1713年には、自身の詩集『ある夫人の詩文集』（*Miscellany Po-*

ems, by a Lady) を出版。さらにポーブが『記念詩華集』(Poems on Several Occasions) に8篇を採用している。明らかに当時の文壇の最前線で活躍していた文人との交流を通じ、アンは自身の文名を確実なものにしていく。一方で、このサークルに女性の存在を他に見つけられない事実は、女性が文筆で名を成す困難を物語っている。『アレクサンダー・ポーブ作品集』(Works of Alexander Pope, 1717) にはアンがポーブに捧げた詩が採用されている。『閨秀詩集』(Poems by Eminent Ladies, 1755) には、18人の女性文人の内にその名を連ねている。アンの文筆活動期間、先述したように「コーヒーハウス」文化の隆盛期でもあったが、当時のコーヒーハウスに貴族階級の教養ある女性が足を踏み入れることを許容する倫理観はなかった。また、居酒屋を含めたコーヒーハウスは、その利用を男性だけに限った極めて排他的な世界であったことも事実であった⁽⁸⁾。

こうした時代性、男性優位の文壇に対してアンがどのような想いを抱き捉えていたかを語る詩「弁明」(the apology) が残されている。まず、この作品を示し女性の文筆活動がどのようにタブー視されていたかを検討してみる。

'Tis true, I write; and tell me by what rule
I am alone forbid to play the fool,
To follow through the groves a wandering
 muse
And feigned ideas for my pleasure choose?
Why should it in my pen be held a fault, 5
Whilst Myra paints her face, to paint a
 thought?
Whilst Lamia to the manly bumper flies,
And borrowed spirits sparkle in her eyes,
Why should it be in me a thing so vain
To heat with poetry my colder brain? 10

But I write ill, and therefore should forbear.
Does Flavia cease now at her fortieth year
In every place to let that face be seen
Which all the town rejected at fifteen?

Each woman has her weakness; mine indeed 15
Is still to write, though hopeless to succeed.
Nor to the men is this so easy found;
Even in most works with which the wits
abound
(So weak are all since our first breath with
Heaven)
There's less to be applauded than forgiven. 20

(私が物を書いているというのは本当のこと。教えてくださらないかしら、どんな捷で／私には許されないのでしょうか。道化のまねごとをしたり／木立の中を逍遥する女神を追ったり、／他愛のないことを夢想するのを私の気晴らしに選ぶのを。／マイラは化粧を施しますが、／私の場合は自分のペンで思想を綴るのですが、それは悪業だとなぜ見なされてしまうのでしょうか。／レイミアの場合、男らしい胸板に飛び込み、／借り物の精神がその瞳にはきらきら輝いているのに、／私の凍え始めている脳みそを詩で温めることが、／私にはなぜそんなにも虚しいものになってしまうのでしょうか。／けれど、私は下手くそです。ですから、書くのを思いとどまるべきなのでしょう。／フラヴィアは今40歳を迎えペンを捨てるのかしら、／あちらこちらでその姿を見せるために。／15歳の時に街中が彼女を拒絶したのですから。／女ひとりひとり、その弱点を持っています。私の弱点はそうでも、／未だにペンを捨てないことです。文筆の成功など望むべくもありませんのに。／殿方にとっても、こうした望みはそれほどたやすいとは思えません。／機知にあふれる、ほとんどの作品さえも、／(神から生を初めて賜ってからすべての者は弱い存在ですから)／許しを得るよりも喝采を得る方がまれなのです。)

ここでまず強調されるのは、偏見による性差別によって惹起される秘匿性・隠匿性に通じる問題が存在することである。そして、女性の文筆行為に対するタブーを打ち破ろうとする強い意思であ

る。文章を綴る行為や詩歌を創造する行為などペンによる表現行為は、男性だけの特権であるが、アンはそれにも拘わらず文筆に手を染めていると告白する。それは、現代のカミングアウトであるが、タブーに挑む勇氣ある行為であろう。女性性の振舞い・慣習と思考に窺える道徳律への風刺だ。18世紀では当然と思われた男性中心世界のあり方への異議申し立てなのだが、そのメッセージの厳しい激しさを希釈してくれるのがアンのユーモアと諧謔にあふれた風刺である。詩文を綴ることは「道化を演じること」「詩の女神を追ってふらふらと森をうろつくようなこと」「気晴らしに想像をめぐらすこと」など、世評を開陳しているが、ここにはアンの巧妙な論理の仕掛けがあるように思えるのだ。つまり、そうした取るに足らないつまらないことが、世間の掟によって禁止される理由がわからないと主張しているようなのだ。一方、一般的な女性は化粧に一生懸命である。女にとって、美しくあることは一大事であるという常識と女が文章を綴る愚かさを喧伝する世間とが、同等の価値を持つものとして並立している点にアンの諧謔性を窺える。精神的な満足を獲得する点においても、一般的な女性は男性の愛を獲得することによって、アンは詩作によって精神的な幸福を得るという主張にも、同じような諧謔性が窺えよう。女性が化粧に手間暇をかけ、それも男性の愛の獲得を当然のように求める世間、ならびにそれに従う女性たちへの批判を感じさせる風刺とも受け取れる。もう一つの仕掛けは、第一連の前半で詩歌を綴ることが世間から卑下される行為と規定しているにも関わらず、後半では「思想を彩ること」「凍えた脳みそを温めてくれること」と詩作が高邁な精神性に深く関わることを強調している。一見すると、当時の道徳律への申し立てに思えるのだが、文筆活動と性差に対する2つの価値観と道徳が二重に絡み合っているところにアン特有の表現の巧みさが表れている。

Winchelsea could satirize women very sharply, but her satire is always modified by the fact that it comes from a right-minded woman

rather than a male censor of the sex. Thus, she avoided patronizing generalizations and expected women to meet a universal human standard rather than a specifically 'feminine' one.⁽⁹⁾

(ウィンチルシーはその気になれば女性たちを手厳しく皮肉ったであろう。だが、彼女の風刺は、男性の性検閲官というより女性の正義の気性から発しているもので、厳しさに手加減が常に加わる。このようにして、彼女は一般論を擁護するのを避け、特に女性らしい基準というより普遍的な人間としての基準に見合うよう女性たちに期待したのであった。)

アンが提起するジェンダー問題を現代と同じ理論や手法で議論するのは避けるべきである。性差別の問題が大きな社会問題にならない18世紀において、それまで蓄積された古典的思考や因習の壁は厚すぎるため、図式化された女性観を覆えるはずもなかった。アンは、古典的・封建的社会の一般論や概念を認める。例えば、キリスト教的教えから許容されてきた「女性ゆえの弱さ」を潔いまでにその弱さを認めながらも、その一方で、それを逆手に取って論理的逆転を図ろうとする。アン自身も弱者の一人であると強調することで、同性からは隔絶するだろう孤高性から救われている。しかしながら、外面を装飾し媚態で人間性を繕おうとする愚かしさに、現代の読者の失笑を誘うであろう。苦々しい風刺と諧謔で当時の浅はかな女たちを描写できたのは、アン・フィンチの優れた表現力と洞察力によるものである。また、一般的に認められた道徳的な人生論に留まらず、キリスト教神学の本質を念頭に置いた最終行の結論(There's less to be applauded than forgiven.)に、アンの軽妙な風刺は素振りであって、テーマの深刻さを示す。それと同時にこの小作品に新しい時代の変化を予感させる、アンの斬新な認識の核と広い展開を読み取れる。

この作品「弁明」を現代的視点で概括すると、性差に疑問を挟むのではなく、むしろ性差のバラ

ンスの中に「女性性」の多様性を主張しながら、タブー行為に敢えて挑む「特殊な女性」存在のカミングアウトの体裁を取っている。そうすると、上流貴族階級の女性の優れた社会性や詩歌の才能を評価するのではなく、社会に受容される術に長けた処世術や気の利いた言語表現力にアンの文才を見出すことになるのだろうか。しかし、さらにアンの主張が明確に綴られる全64行で構成された作品「序文」(‘The Introduction’)がある。創作時期は不明だが、「弁明」よりも早く17世紀末から18世紀初頭に書かれたと推測されている。この作品からアンの特質がより色濃く表現されていると思える詩行だけを抜粋する。

Did I my lines intend for public view,
 How many censures would their faults pursue!
 Some would, because such words they do affect,
 Cry they're insipid, empty, incorrect.
 And many have attained, dull and untaught, 5
 The name of wit, only by finding fault.
 And all might say, they're by a woman writ.
 Alas! A woman that attempts the pen,
 Such an intruder on the rights of men, 10
 Such a presumptuous creature is esteemed,
 The fault can by no virtue be redeemed.
 They tell us we mistake our sex and way;
 Good breeding, fashion, dancing, dressing,
 play,
 Are the accomplishments we should desire; 15
 To write, or read, or think, or to enquire,
 Would cloud our beauty, and exhaust our time,
 And interrupt the conquests of our prime;
 While the dull manage of servile house
 Is held by some our utmost art and use. 20

(私は自分の詩を世間に公けにするつもりで書いたのです。／どれほど多くの検閲の目が粗探しをしたとしても！／欠点はこういうことばに

影響するから、中にはこう叫ぶ人もいる。／「つまらない、中身の無い、不正確な詩だ」と。／多くの者は愚鈍で教育を受けていないので、せいぜい獲得するのは／粗探しの結果、名ばかりの機知だ。／本当の審判は機知不足だと非難するかもしれない。／そして全員が口をそろえて言うかもしれない、「それは女たちが書いたものだから」と。／何ということだ。ペンを執ろうとする女か！／男たちの権利の世界の侵入者よ。／何という大それたことをする生きものだ。／その誤りはどのような美德を持ってしても贖えない。／殿方は私たちが性と道を間違えているとおっしゃる。／良き生まれ、流行、ダンス、衣裳、遊び／それらが、私たちが極めるべきものごと。／書くこと、読むこと、考えること、もしくは調べること／そうした行為は、私たちの美を曇らせ、私たちの人生を疲れ果てさせ／私たちの青春の時間を遮るもの。／婢女如きつまらない家政管理の仕事は／私たちの最高の技と権利で支えられているというのに。)

「弁明」には、「女の弱点」を認識しながらもそれを論理的に逆手に取って巧妙に女性が男性と同じ土俵で言語表現を行おうとする主張の妥当性が訴えられていた。それに対して、「序文」における彼女の主張は直截で激しい。オーガスタン時代のペンによる言語表現の実態が具体的に明示され、時代思潮を知る貴重な資料とも考えられる。「書く」行為は、明らかに「男たちの領域」でのみ許され、「女たち」が足を踏み入れるのを禁じられた別次元の領域であったということが明らかである。ここには能力と行為の二項対立が明確に描写されている。「頭の鈍い、無教養な」(‘dull and untaught’)女たちが禁忌を破って文筆を敢えて行えば、その女たちは「侵入者」(‘Such an intruder on the rights of men’)「むってぼうな生きもの」(‘Such a presumptuous creature’)と決めつけられる。さらに性差による分業では、女の仕事は「子をたくさん産み育てること、流行、ダンス、おしゃれに遊び」(‘Good breeding, fashion, dancing, dressing, play’)。一方、男の仕事は

「書くこと、読むこと、考えること、調査すること」(‘To write, or read, or think, or to enquire.’)。19行から20行にかけての詩行で窺えるのは、女たちの技と権利が一番発揮されるのは、奴隷の如く身を粉にして働きながら支える単調な家政の領域だと言われる現実らしい。こうした明確かつ激しい主張が、頻繁に語られるのは、早くも18世紀後半、さらに議論の広まりは19世紀後半、あるいは20世紀では第二次世界大戦後まで待たなくてはならない。こう主張する「場」は、アン・フィンチ個人が造りだした私的交友関係の枠内に限られていた。フランスの例に見る政治的役割を持った「サロン」は英国に育たず、いわゆる文芸に特化した英国の「サロン」登場までまだ時間が必要だった。前述したようにアンが個人的に培った人間関係、当時の文壇の大御所の協力なくしては、彼女の夢の実現化は困難であったのを知っていたはずだ。さらに、性差の区別が付けられた「領域」に敢えて挑むためには、その性差を精神・能力の両面において乗り越えなければならなかった。性差によって生じる不公平と理不尽さを堂々と申し立てるが、アンの詩的才能が磨かれてゆくと同時に、主題の舞台を華やかな表から精神の深奥へと沈潜してゆくのである。そして終には、ワーズワスが激賞した『夜想曲』に結晶するのである。

3. 「サロン文化」誕生の胎動

アン・フィンチの前ロマン派的態度については、かつて拙稿でも若干の検討を行った「楽園」に関する考察⁽¹⁰⁾、ならびに自然との関わりが主題となるので、稿を別にして考察を加える必要がある。さらにそれ以降の女性著述家と「サロン」文化は、別稿に譲らなくてはならない。

1830年代以降は、女性の社会進出の機運の高まりに併せて、「サロン」に集う多士済々な者たち、そこから誕生する女性著述家たちが「サロン」を活躍の場に変えてゆく。その象徴的人物が「青鞥」と呼ばれたブルーストッキングの女性会員たちである⁽¹¹⁾。Lady Mary Wortory Mon-

tague, Lady Elizabeth Montague, Lady Hester Chapone (née Mulso), Catherine Macauley, Hanna Moreらアン・フィンチの血を受け継ぐ者たちと言えらるだろう。その他にも、1755年ロンドンで出版された『閨秀詩集』(*Poems by Eminent Ladies*)には、18名もの女性詩人の作品が収められている⁽¹²⁾。これらの女性たちが社会の表舞台に出る以前は、文筆活動は男性だけに許された活動領域であったことを忘れてはならない。というのも、英国において「サロン」文化誕生の素地には男女の両性が共有し合う「領域」であった事実は特に留意すべき点であろう。最後に「サロン」の定義にも時代的変遷が窺えることを示し、この稿を締めたい。

Finally, it is imperative to recognize that the term “salon” itself is in fact an anachronistic one in relation to the seventeenth and early-eighteenth century. In these periods “salon” was used solely to refer to a room in a house or apartment; only at the end of the eighteenth century did it begin to be used to refer to a social gathering. The term *conversazione* was frequently employed by English salon participants when referring to their gatherings, rather than the term *bureau d’esprit*, which was often favoured by French participants.⁽¹³⁾

(最後に重要なことなのだが、17世紀から18世紀初頭に関しては「サロン」ということば自体は時代錯誤的な用語であると認識すべきである。この時代、「サロン」という用語は、単に「部屋」や「貸間」という意味でしかなかった。しかし、18世紀の終わり頃になると、「サロン」は社交の集まりを指すようになったのだ。その集まりを言及する際に、「対話」という用語をしばしば英国「サロン」の参加者が好んで使用していた。それに対して、フランスの参加者たちは「精神の部屋」という用語を好んだようだが。)

名誉革命後、ある程度の落ち着きを回復するまで英国の1780年代から1830年の半世紀は、特に「書く」行為の視点から眺めると興味深い社会面が表出し、女性の社会進出の新しい展開を準備した時期であったことがわかる。フランスにおいては、すでに社会的影響力を行使した「文芸サロン」が存在し機能していたが、英国にはまだフランス式「サロン」は誕生していなかった。その代替施設が「コーヒーハウス」である。しかしながら、公共施設とされながらも、「コーヒーハウス」は現代マス・メディアの役割を果たすジャーナリズムの誕生を準備したが、男性専用の排他的施設であった。人的交流や情報交換が男性専用の領域で活発に行われる一方、家政の管理・運営が女性たちの仕事「場」となっていた。そうした性差の分業が確立していた時代に、ペンによって自己表現に挑むことは、体制への申し立てにつながる危険な社会的自殺行為であると同時に、勇気ある行為でもあったろう。政治は王党派、それもジャコバイト、宗教はカトリックと、アン・フィンチの属性は、この時代にあっては、反主流に属していた。だからこそ、世間の思惑に振り回されずに、自己の信条を高らかに表現できたのかもしれない。また、彼女の社会的ステータスに支えられていたことも大きい。当時「サロン」を形成することもなく、個人的な限定的交流関係によって社会の表舞台に登場できたというのは事実であろう。しかし、現代批評にも十分耐えうる作品の質は、アン・フィンチの優れた文才を示している。さらに上流階級の緊密で利害関係に支えられた文芸評価とは無関係に、ポーブヤスウィフトなど文壇の有力者が彼女の才能を認めたことは大きな意味があった。性差が社会の道徳律として当然だったオーガスタン時代に、それを超克した批評眼を持った文人もまた、アンを支えた存在であった。18世紀初頭は、アンのような突出した女性文筆家の継続的活躍が、それ以降に誕生する多くの女性文筆家に活躍できる「場」を準備したと言えるだろう。そして、その中から傑出した女性を核とした「サロン」が立ち上がることになるのだが、英国において実質的な「サロン」が誕生するま

で、あと数十年待たなければならぬ。

付記

本稿は学術研究助成基金助成金（基盤研究C 一般）に採択された（課題番号17K02552 研究課題名 グレゴリ夫人と文芸サロン——情報・教育・活動の領域）の研究成果の一端である。

《注》

- (1) ユルゲン・ハーバーマース著、細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換』（未来社、1994年）48～49頁
- (2) 同上掲書、51頁
- (3) 同上掲書、52頁
- (4) 伊藤航多、佐藤繭香、菅靖子編著、『近現代イギリス女性史論集 欲張りな女たち』（彩流社、2013年）20頁～21頁
- (5) *Women and literature in Britain 1700-1800*, ed. Vivien Jones (Cambridge: Cambridge University Press, 2000) 3.
- (6) ヴェレーナ・フォン・デア・ハイデン＝リーシュ著、石丸昭二訳『ヨーロッパのサロン』（法政大学出版局、1998年）100頁
- (7) *The Poems of Anne Countess of Winchelsea*, ed. Myra Reynolds (Chicago: University of Chicago Press, 1904) 51.
- (8) *Literary Salons Across Britain and Ireland in the Long Eighteenth Century*, Amy Prendergast (London: Palgrave Macmillan, 2015) 2-3.
- (9) *Early Women Writers: 1600-1720*, ed. Anita Pacheco (London and New York: Longman, 1998) 232.
- (10) 拙論「アン・フィンチの楽園」『十七世紀英文学と自然』（金星堂、2002年）103頁～122頁
- (11) プリジェット・ヒル著、福田良子訳『女性たちの十八世紀』（みすず書房、1990年）66頁
- (12) *Poems by Eminent Ladies* (1755) の目次に記載されているアン・フィンチ以外の女性詩人たちは以下の通り。

Mrs. Katherine Phillips (1631-1664), Mrs. Aphra (Amis) Behn (1640-1689), Lady Chudleigh; (1656-1710), Miss Anne Killigrew (1660-1685), Mrs. Elizabeth Singer Rowe (née Singer, 1674-1737), Mrs. Catherine (Trotter) Cockburn (1679-1749), Mrs. Mary Barber (1685-1755), Judith Madan (née Cowper, 1702-1781), Mrs. Constantia Grierson [née Crawley] (1705-1732), Mrs. Mary Jones (1707-1778), Mrs. Pilkington (born Laetitia van Lewen, 1709-1750), Miss Elizabeth Carter (pen name Eliza; 1717-1806), Mary Leapor (1722-1746), Mrs. Masters (生没年氏名不詳), Mrs.

Monk (生没年氏名不詳), Lady Mary Wortory Montague (née Pierrepont; 1689-1762), Henrietta "Harriet" Pelham-Holles, Duchess of Newcastle-upon-Tyne (1701-1776)

(13) *Literary Salons Across Britain and Ireland in the Long Eighteenth Century*, Amy Prendergast (London: Palgrave Macmillan, 2015) 7.